

森の通信

宮崎県総合博物館だより

第22号

発行日/平成7年4月15日

Museum and Cultural Institutions of Miyazaki Prefecture

発行 / 宮崎県総合博物館 〒880 宮崎市神宮2丁目4番4号 TEL (0985) 24-2071

特別展 江上波夫コレクション

シルクロード西域文物展

— 楔形文字粘土板からイスラム陶器まで —



撮影 高橋孝一 (タクラマカン砂漠)



◀ 女性祈念者像
(シュメール)

▼ 円筒印章
(シュメール～アッカド)



▲ 彩文土器
(イラン西南部)

水晶とラピスラズリ製の首飾り(イラン北部)



▼ 青銅板
(ルリスタン文化)



「シルクロード」という言葉の響きには、私たち日本人にとっても何かしら郷愁を抱かせるものがあります。言うまでもなく正倉院に納められているガラス器や綿、楽器などはシルクロードを經由してもたらされたものとしてよく知られています。しかし、それらがどこで作られどんな人々を經由して日本まで伝播したのか・・・よくわからないことだらけです。

今回の展覧会では、シルクロードを東西文明の交渉路、かけ橋としてとらえ、シルクロード関連文物のなかでも、いままで宮崎では紹介する機会がなかった古代オリエント地域の出土資料を中心に展示します。たとえば、最古の都市国家を形成したシュメール人の残した円筒印章、楔形文字粘土板、ラピスラズリ製首飾りや遊牧騎馬民族の生んだ青銅造形の傑作と讃えられるルリスタンブロン

ズ、なかでも青銅製馬具や杯また、華やかな色彩のイスラム陶器の数々、西洋と東洋が混交する不思議な魅力を放つガンダーラ仏など多彩な資料約200余点で構成します。東西9000kmにおよぶシルクロードを往来したこれらの文物は、数千年間におよぶ歴史を語るものとして、同時にユーラシアの諸民族の個性が生んだ芸術作品として限り無い魅力に富んでいます。(近藤)

会期	平成7年5月20日(出)▷6月18日(回)
	— 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) —
休館日	毎週月曜日(5月22日、29日/6月5日、12日)
入館料	大人 700 (550) 円 高大生 500 (350) 円 小中生 300 (200) 円

※()内は、団体(20名以上)の料金

博物館総合整備事業

— 博物館が変わります —

1 経 緯

昭和46年に開館した本館は、その後23年を経過し、展示等設備の老朽化や旧式化が見られるようになりました。一方、本県では置県100年記念事業として県立図書館、県立芸術劇場、県立美術館を備えた総合文化公園建設計画がすすめられ、すでに県立図書館と県立芸術劇場は開館しています。建設中であった県立美術館も今秋には、開館する運びとなり、それに伴って本館の美術資料は県立美術館に移管されることとなります。

これら、本館を取り巻く状況の変化のほか科学技術の進展、社会の成熟化、高齢化など社会情勢の変化も著しく、博物館に対して多様な役割が求められるようになりました。

本館では、このような状況に対処するため、平成元年「今後の博物館の在り方について」博物館協議会に諮問しました。平成3年に答申を得た後、平成5年「宮崎県総合博物館再編整備事業」に着手し、平成6年度には「再編整備基本構想及び基本計画」をまとめ「展示基本設計」の作成を終了しました。

2 整備事業の概要

- (1) 新しい展示機器や手法を導入するなど、魅力ある展示が展開できるよう展示室を抜本的に改造する。
- (2) 広く県民のニーズに応えるため、多様な講座を開講するなど普及活動を充実させるため必要な施設を整備する。
- (3) 資料の収集・保存・研究等の活動が円滑にすすめられるよう収蔵庫等必要な施設を整備する。
- (4) 高齢者や身障者に配慮するなど、広く県民に利用される開かれた博物館になるよう整備する。

3 進行計画

年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	開館
展 示	基本設計	実施設計			
		資	料	製 作	
建 築		実施設計	施	工	周辺整備

話題のコーナー展

農 耕 用 具 (西都原資料館)

農耕用具は、稲作用具と畑作用具に大別できます。それぞれ土地を耕したり、種をまいたり、苗を植えたり、管理したり、収穫したりする用具があります。

工夫が感じ取れます。

(清水)

〔展示期間：平成7年2月15日～10月8日〕

用 具 例

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 耕す | カブキリ、スキ、クワ、マンガ、ゴロマンガ、クレシシキなど |
| まく・植える | タウエツナ、ナエブネ、タネマキキ、ムタシロカキなど |
| 管理する | アブラサシ、ズラシ、コカシ、スイシャ、アゼヌリ、タゲタ、カカシなど |
| 収穫する | カマ、センバ、トウミ、ウス、トオシ、メグリボー、バラなど |



【耕す】



【まく・植える】



【管理する】



【収穫する】

西都原周辺では、一ツ瀬川や三納川に沿った平野部に水田が広がっています。特に、江戸時代につくられた杉安井堰と用水路は、それまでの荒れ地を水田に変え、米の生産を増やしました。

西都原台地では、昔から畑作が行われていました。春は菜種や麦、夏は葉たばこや大豆、秋はさつまいもやそばや大根などの収穫が盛んでした。また、養蚕のための桑畑や、茶畑も多く見られました。

本展示では、耕運機やコンバインのない時代に活躍したこれらの農耕用具を、それが果たした役割を示しながら紹介します。その一つ一つから、当時の人々の願いや

イトトリキ

蚕を飼って繭をつくらせ、その繭から糸をとるという仕事は、古い時代から行われていたといわれています。

糸とりは、火鉢にかけた鍋で繭をゆっくりと煮ます。湯で柔らかくなった繭の表面から糸口をひき出し、糸枠に巻き取ります。多数の繭から同時に繭糸をひき出し、鍋の上の部分に糸よせしたものを一つにまとめるため、糸とり機の綾振りが左右に動きます。

本資料は、収穫した繭から生糸をとる手回し式の糸とり機です。取っ手を回すと木製の歯車がなめらかに回転し、それにつれてとりつけられた糸枠が回転して、糸を巻き取る仕組みです。付属品としての糸枠が4個残っており、そのうちの2個には当時の糸が巻き取ったままの状態です。

聞き取り調査によって、大正時代から昭和時代初期にかけて宮崎市周辺部で使用されたことがわかりました。本体の高さは、約35cmで大正五年の墨書、糸枠の1個には、大正十年の墨書がそれぞれみられます。使用地周辺は、現在住宅地ですが、かつて桑畑がひろがり養蚕が盛んに行われていたことがうかがえます。

このように、墨書等の記録が残っているなど保存状態が良く研究や展示に活用できること、また、使用地周辺の当時の土地利用の状況や生産の様子の一部をうかがうことができる点で貴重な資料です。 (地材)



泳ぎの名手 ゲンゴロウ

溜池や小川の身近な昆虫類は、トンボ・アメンボ・ミズスマシ・タイコウチなどが挙げられますが、ゲンゴロウの仲間には、特に親しみ深い種類です。一口にゲンゴロウと言っても、日本に120種ほどがいて、体長1mmの微小種から4cm余りにもなる大型種までさまざまです。形が卵形や楕円形で体の線が流線形をしており、後脚には、毛が密生したかまもオール状になり、甲虫の仲間では、最も水中生活に適した「泳ぎの名手」です。

普通、私たちがよく目にするのは、体長1cm前後のコシマゲンゴロウやヒメゲンゴロウです。川よどみや、溜まり、池など、時には学校のプールなどで活発に泳いでいる姿の見られることがあります。しかしながら、近年の水質汚濁のため、これらの種類を含め、大多数のゲンゴロウ類がすみかを追われ、ほそぼそした生活を送っています。日本最大のゲンゴロウ(ナミゲンゴロウ)は、以前は、宮崎県内でも、少ないながら生息が確認されていましたが、現状不明となっています。スジゲンゴロウは、全国的にも絶滅の危機に瀕している種類で、1930年代以前には宮崎県にも生息しており標本が残っていますが、これも現在生息の証拠は得られていません。

宮崎県内では、これまで調査不足もあって、ゲンゴロウの仲間は12種しか記録がありませんでしたが、ここ1~2年の調査で、36種も生息していることがわかりました。その中には、九州新記録のキボシコツブゲンゴロウや希種のマルコガタノゲンゴロウ、チンメルマンセスジゲンゴロウなどの種類が採集され、明るい話題となりました。極最近では、水質保全や汚染を出さない運動が市民ぐるみで徐々に定着しつつあります。ゲンゴロウのすめるような水域が拡大していけば、私たちの健全な生活環境が豊かになることにもつながります。 (岩崎)



スジゲンゴロウ
1933年採集 宮崎市江平池産
(宮崎大学農学部寄贈標本)

